

IAUD Newsletter vol.3 第10号 (2011年1月号) 目次

1. 新春特集：山本会長・岡本議長に聞く～国際 UD 会議を終えて、IAUD の今後～ 1
2. 「第 5 回ユニバーサルデザイン全国大会」参加レポート
～「配慮」から「前提」の社会へ 7
3. 世界の UD 動向：「第 5 回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022」本会議開催！
新刊紹介「誰でも手話リングル」 ほか 13

IAUD として当面の最大のイベントであった国際 UD 会議を終え、無事に 2011 年を迎えました。IAUD もユニバーサルデザインの普及と実践をミッションとして活動に取り組み、今年で 8 年目となります。その間に社会情勢も大きく変化し、それに伴い UD の捉え方や IAUD に対する期待も少しずつ変化してきました。2011 年度からの 3 か年を対象とした中期活動計画の検討もスタートしていますが、IAUD の今後の方向性を左右する法人化という大きな問題などもあり、IAUD の活動も新たな局面を迎えます。

2011 年の年初にあたり国際 UD 会議をはじめとするこれまでの活動を振り返り、今後の IAUD の方向性を探るため、山本会長と岡本議長にお話を伺いました。新年ということもあり、対談は和やかな雰囲気でしたが、今後の方向性に触れる部分では厳しいご意見も交わされました。

また、佐賀県嬉野市で 3 年ぶりに開催された「第 5 回ユニバーサルデザイン全国大会」では成川理事長が国際 UD 会議の報告と IAUD の紹介をしました。その模様を含め概要をレポートします。

新春特集：山本会長・岡本議長に聞く ～国際 UD 会議を終えて、IAUD の今後～



日 時：2011 年 1 月 14 日（金）10：00～11：00
場 所：富士通株式会社 本社（東京・汐留）来賓室
お話し：山本 卓眞（IAUD 会長）
岡本 一雄（IAUD 評議員会議長）
聞き手：成川 匡文（IAUD 理事長／情報交流センター所長）
川原 久美子（IAUD 事務局長）

成川： 明けましておめでとうございます。浜松市での国際 UD 会議を無事に終え、現在、2011 年度から 3 か年の中期活動計画の策定に取りかかっているところですが、本日は、まず最初に国際会議に関してのご感想や忌憚のないご意見を伺い、続いて IAUD の今後の方向性について、日頃お考えになっておられることをお聞きしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それではまず、岡本議長からいかがでしょうか？

岡本： 今回の国際会議はこれまでの横浜、京都という大きな都市から、浜松市という中規模の都市に場所を移しての開催で、そのこと自体は間違っていなかったと思いますが、結果的に会場サイズと入場者のアンバランスや運営面での難しさなど、大都市ではなく地方での開催がゆえの問題点もあったように感じます。しかし、いろいろ言われることに過敏に反応して、早計に開催地を大都市部だけに限定するということにはしないようにしたいですね。



成川： われわれも人数を読み切れないところもあり、結果としてメイン会場が広過ぎたということや、会場自体のアクセシビリティの問題もありました。地方で開催するからあのようになってしまったんだとか、参加企業の PR 効果なども考えると、やはり大きな都市で開催すべきだなどのご意見もいただきましたが、IAUD の今後の活動方針とも深く絡んできますし、簡単に大都市に戻そうということではなく、地方で開催する意義も良く考えたうえで、これからの開催地を検討していきたいと思っています。

山本： 確かに大ホールが広過ぎたという印象はありますが、全体としては良かったのではないのでしょうか。特に地元の熱意というのは大変なもので、展示会場では物産展などもありましたが、あれはあれで人を呼んだところもあり、地元の意識高揚などのメリットも十分あったのではないのでしょうか。

岡本： 浜松の一般市民の皆さんにとって、これほどさまざまな UD 製品や UD の考え方に触れる機会ができたということは、それだけでもとても良いことではないのでしょうか。国際会議が開催されなかったらできなかったことでしょうね。しかし、中小規模の都市で開催する場合は、会期だとか会場の広さとかセッションの数などいろいろな点を含めて、全体の規模を大都市での開催とは考え方を少し変えた方が良いかも知れません。

成川： 山本会長もおっしゃったように、浜松市として展示会場をはじめ大変盛り上がっていましたが、例えば東京で開催したらあのようにはならないですね。国際会議の後、12 月に佐賀県の嬉野市で 3 年ぶりに開かれた UD 全国大会があり、そこに呼ばれて IAUD と国際会議

の紹介をしてきたのですが、県知事以下、揃って出席されUDに関連して熱弁をふるっておられ、地元が大変盛り上がっていました。地方の良さというのはこういうところにあるなと感じました。



山本： 今回の国際会議では地元のヤマハさんが音楽の演奏など熱心にサポートされ、視覚障害の方の琴の演奏など、海外から来られた皆さんも大変興味深くご覧になっていました。あのような企画も開催地が音楽に関連した産業の盛んな浜松ならではのところでした。また、浜松市だけでなく静岡県も川勝知事の講演をはじめ大変熱心な取り組みようで、これまでの大都市での開催ではまったく見られなかった対応で、とても良かったところでしたね。

川原： 中日新聞や静岡新聞など地元のメディアも毎日のように記事として熱心に取り上げていただきました。9月の記者説明会から、日経新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞などの全国紙でも掲載していただきましたが、地元紙ではさらに見方を毎日いろいろと変えて、本当に熱のこもった記事を書いていただきました。

岡本： 少しでも多くの人に来ていただくということでは、京都などでは会議が終わった後も観光できる場所が近くに沢山あって、他と比べればそれほど苦勞しなくても人を呼びやすいということもあるでしょうね。今回はそういったところはあったのでしょうか？

成川： 開催地を紹介するということではエクスカージョンの企画もずい分検討したのですが、移動時間や料金設定の問題などで適当な企画がたてられず、最終的には断念しました。また、市民の方の動員ということでは浜松市もドーナツ化現象で中心部に居住している人が少ないという問題もあったと、後でお聞きしました。

岡本： 私がお聞きしたところでは、会議の参加料金の問題もあったのではということでした。地元の一般市民の方に来ていただくには、もう少し安くしないと難しいのではないのでしょうか。

成川： 確かにその意味では入場が無料だった展示会場には、もちろん地元に関連した展示や出し物、企業展示や経済産業省のブースなど、内容的に大変充実していたということもありますが、大変多くの浜松市民の皆さんにご来場いただきました。開催規模や会場構成などの問題とともに、今後の課題として考えなければならないところでしょうね。

それでは、これからの国際会議のあり方、方向性について、例えば国際会議の開催のспанについては4年毎では長すぎるというご意見もお聞きますが、そんなことも含め、どのようにお考えでしょうか？

岡本： IAUDのあり方も社会の変化に応じて変わっていかなくてはいけないと思います。そのヴィジョンがまず先にあって、それで国際会議をどうするかという順序で考えるべきでしょうが、UDが次第に社会に浸透してくると、毎回、これまでのような大規模な会議を開催するというだけでなく、規模を小さくして全国いろいろな場所で、あまり間を置かずに開催して、時々大きな規模の会議を開催



するという考え方もないわけではないと思います。

愛知県も万博を開催することでいろいろと頑張ったのですが、大きなイベントをきっかけとしてUD化が進むということもあり、できるだけ多くそのような機会をつくるという意味も大きいと思います。

川原： 会議の開催を街づくりのきっかけにしたいとおっしゃっている自治体の方からの声もお聞きしています。また、UDというのは議会に提案して予算を確保するにも、大変、説明しやすいテーマだということもおっしゃっていました。

山本： しかし、会議を誘致する側はそれで良いかもしれないが、一方で、協賛する企業側から見ると、会議開催の Spann が短くなると、現実的にはいろいろな面で負担が増えますね。

成川： いくら規模を小さくとはいえ、協賛金の負担を考えると問題はありますね。予算面で期待できる兆候としては、開催を誘致する自治体だけでなく省庁が大変前向きであるということがあります。今回の静岡県や浜松市、経済産業省の展示ブースのように金銭的にも協力が得られれば参加企業の負担を少しは軽くできる可能性はあります。



IAUD の活動の 3 つの視点、「国や自治体に向けた UD 実現のための基盤整備」、「企業や団体に対する UD 製品・サービス提供の働きかけ」そして「生活者に対する適切な選択をするための情報提供」ということで考えてみると、例えば今回の国際会議をきっかけに省庁や政治との関係も少しできてきましたが、生活者との関係ということではまだまだ課題があるように思います。また、その検討を進めるうえで企業会員だけでなく団体会員や個人会員の声をどう取り入れて行くか、というプロセスの問題や、研究活動のテーマということでも、共有できる課題が業種によっては見つけ難いというだけでなく、準会員や賛助会員の活動参加をどう促していくかといった課題も出てきています。

現在、理事会でタスクフォースを作って、本年度までの 3 か年に続いて、2011 年度からの次の 3 か年を対象とした中期活動計画の検討を進めています。基本的なビジョンや骨子は大きく変えなくてもいいとは思いますが、次の国際会議を含めて当面の活動方針を研究テーマの方向性なども含め、議論しようとしています。ぜひ、これまでの活動をご覧になって、今後の大きな方向性や考えておくべき課題など、ご意見をお伺いしたいのですが？

岡本： 例えば自動車産業でいうと、従来は車だけで独自に発展してきたものが、ハイブリッド車や電気自動車などが出てくると、「スマートグリッド」のように住宅の電気設備や情報ネットワークなどを含め、全体最適を図る中で車を考えるようになるわけですが、個別の製品・サービスでなく生活全体をトータルに見ていくと、UD の課題としても新しい視点がまだまだ出てくると思います。製品・サービスの UD も視野を広げて少し先を見たテーマを考えていく必要があるでしょうね。

山本： 国際会議のパネルディスカッションでも話題に出ていましたが、高齢者の自動車免許を 70 歳過ぎたら取り上げるという話があります。しかし、日々の買い物や病院への移動などが次第に困難になる高齢者こそ車が必要で、免許を取り上げるのではなく、より安全な



車や移動手段を考えるという方向へ向かうべきです。

また、これまでのデザインの領域を越えるかもしれませんが、例えば、高齢者が病院へ行くのではなく、逆に医者が順回する社会システムをつくるというような、これまでとは違った新しい発想が必要なのではないのでしょうか。

個別の製品・サービスは結構いいところまでできているので、これからは社会システムを変革するような領域にも踏み込んでいくと、また新たな展開が考えられるのではないのでしょうか。いよいよそういう時代にきていると思います。



川原： 私のところにいただくメディアからの原稿依頼の傾向を見ていても、最近は製品やモノに関する内容は割合からすると次第に減ってきていて、サービスや社会システムの持続性などに関連した依頼が徐々に増えています。IAUD の事業や研究テーマもそのような社会的なテーマまで考えていくと、活動の領域はこれからまだまだ広がっていく可能性があるように思います。

成川： 研究部会にもぜひ伝えて、取り組みテーマとして検討したいと思います。余暇の UD プロジェクトの CM 字幕の取り組みや、移動空間プロジェクトでは静岡市と公共交通機関のシームレス化を進める取り組みなど、公共性の高い活動もしていますが、IAUD としても個々の製品・サービスから対象を広げ、社会的な UD、社会基盤まで考えるソーシャルデザインの方向へいくと、まだまだ面白いことがたくさんあるように思いますし、そうになると団体としての存在意義も強まってくると思います。

岡本： 日本ではいろいろな省庁の壁があって、米国の例などと比較すると新しい実験が自由にできなかったりします。IAUD のような団体が中心となって、省庁や大学の先生とも協力して進めると、案外うまくいくということもあるのでないのでしょうか。

成川： これからの方向性として国や自治体と共同して取り組むということや、UD というテーマだと政治の世界でも超党派でうまくやれるということもあるかも知れないですね。

今後の IAUD の活動を考えるとき、法人化をどうするかという問題についても、そろそろ本格的に具体的なアクションをおこしていけないと考えています。何度かお聞きしている課題ではありますが、改めて現時点で、どのようにお考えでしょうか？

山本： いろいろなリスクなどを考えると法人格は持った方が良く私は考えています。そうしないと資金面でも問題になってくると思います。しかし、公益団体は条件としていろいろ大変ですから、最終的に目指すのは公益団体かも知れませんが、最初から公益団体を目指すのか、一旦、一般社団法人になってからか、というところはよく考える必要があると思います。

岡本： 私も法人化はそろそろ実行に移す時期だろうと考えますが、一旦、公益とか社団などになってしまうと簡単に他の形に変えられないので、運営面や税制上のメリットなど、いろいろな面をよく勉強してください。私の知っている団体でも組織や運営面でさまざまな工夫をしているところもあるので、結構時間もかかり大仕事だとは思いますが、良く調べたうえで進めていただきたいと思います。



成川： 確かにいきなり公益法人はいろいろ難しい点も多いので、まずは一般社団法人からという考えはありますし、組織的にもかなり変わることになりますので会員の皆さんのご意見もよく伺って、理事会でも十分な議論を尽くした上で進めていきたいと思っています。



次の国際会議の開催地の問題も、決定のプロセスとして今回と同様にオープンにして、公平性を保って決めていく必要がありますし、その地域で開催する意義や見込まれる効果というところもよく検討しなければいけないと考えています。次の開催が4年後より早まるということになると、準備の時間や協賛企業の負担の軽減ということも考慮して適切な開催規模にすることも重要な課題です。

山本： 省庁や政治との関係も少しずつできてきたので、そろそろ IAUD の会員の中で話をするだけでなく、経済団体を巻き込むということも考えて良い時期かも知れませんね。

成川： 本日は貴重なご意見をありがとうございました。課題は山積していますが、次の中期活動計画とともに新たな IAUD のあるべき姿の検討を早急に進めて行きたいと思いますので、今後ともよろしく願いいたします。本日はお忙しいところお時間をいただき、本当にありがとうございました。



「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」参加レポート ～「配慮」から「前提」の社会へ～

IAUD 情報交流センター 蔦谷邦夫
(富士通デザイン(株))

昨年12月21・22日、佐賀県嬉野市において、全国で広がるUDの先進的な取り組みの紹介・情報交換などを通じ、UDの普及・推進を図ることを目的とした「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」が開催されました。全国大会としては3年ぶりに開かれたもので、IAUDは事例発表の一つとして成川理事長が浜松市での国際UD会議とIAUDの紹介を行いました。

大会を通してIAUD会員をはじめ、IAUDのイベントでもおなじみの方々の姿もかなり見うけられました。温泉地での開催ということで、地元の観光資源をより生かすためのUD、そしてそれをいかにビジネスにつなげるかという強い思いが、街ぐるみの真剣な取り組みとなって現れていることが感じられた2日間の大会概要をレポートします。

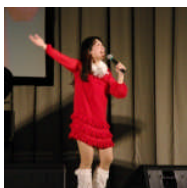


開催概要

- ・名 称：第5回ユニバーサルデザイン全国大会
- ・会 期：2010年12月21日（火曜日）～22日（水曜日）
- ・会 場：佐賀県嬉野市公会堂、和多屋別荘、大正屋、和楽園、華翠苑
- ・主 催：ユニバーサルデザイン推進自治体連絡会、佐賀県、嬉野市、(財)自治総合センター
- ・後 援：内閣府、総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省
- ・協 力：第5回ユニバーサルデザイン全国大会嬉野市実行委員会
- ・大会キャッチフレーズ：優・YOU・湯～まんなかにあなたがいます。佐賀のユニバーサルデザイン

【初日】12月21日（火曜日）（会場：嬉野市公会堂）

ウェルカムコンサート



開会式に先立ち、佐賀県UDのイメージソング「あしたのそら」を作ったシンガーソングライターう～みさんなどの出演者によるウェルカムコンサートが開かれました。「あしたのそら」には「みんな大好きな誰かのことを考えて生きていて、そうすることで素敵な世の中になっていく」という想いが込められています。

開会式・基調講演「佐賀から広がるユニバーサル社会」古川康 佐賀県知事



開会式ではUDによるまちづくりに取り組んできた嬉野市の谷口市長のあいさつに続き、佐賀県知事 古川康氏による基調講演が行われました。講演のなかで、全国的にも先駆的なパーキングパーミット制度や独自の歩道段差解消の取り組み、UD推奨品制度や地域共生ステーションの取り組みなどが紹介されました。

UDは、もはや「配慮」という段階から、あらゆる施策の「前提」として県政運営の基本となる考え方であり、全ての人のためであること

は、自分のためでもある、というメッセージが大変印象的で、UD の浸透・実践により社会を変えていくには、トップに立つ人間の強いリーダーシップが大変重要であることを改めて感じさせられる、熱のこもった講演でした。

記念講演：「ユーザーの視点で商品開発をプロデュース」松井一代さん



テレビのバラエティ番組や「松井棒」などでもおなじみ、“元気配達人”と自称する松井一代さんの元気いっぱいの講演会が行われました。家族の健康や家事を主婦の視点から徹底的に突き詰めて考え抜き、こだわりと工夫を重ねて開発された数々の商品は、使いやすさだけでなく、良いものを求めやすい価格で提供するという基本コンセプトも手伝い、主婦層から幅広く支持され、派手さはないけれど着実に売れ続けています。話の内容もさることながら、本人の大変パワフルな話しぶりに、聞いているほうにも元気をいただきました。



人気商品の1つの圧力鍋

事例発表

官・民・UD 推進団体という3つの異なった視点での取り組みが、事例として紹介されました。IAUD からは成川理事長により、昨年、浜松市で開催された国際 UD 会議を中心とした IAUD の幅広い取り組みが紹介されました。

①「歴史空間の保全と活用におけるユニバーサルデザインの推進」

～吉野ヶ里歴史公園での取り組み～

国土交通省 吉野ヶ里歴史公園 事務所 所長 井村久行氏

吉野ヶ里遺跡は佐賀県東部で弥生時代に築かれた環濠集落跡で、現在は国営吉野ヶ里歴史公園として一部を国が管理する公園となっています。歴史的な建造物自体が現代の基準からすると不便さやバリアが多く、そのなかでより快適に、より分かりやすく来園者に弥生時代を体感していただくためのUD化の取り組みが紹介されました。



②「ICT が拓くユニバーサルデザイン」

～佐賀県とマイクロソフトの取り組み～

マイクロソフト(株)技術統括室 マネージャー 大島友子氏

パソコンやインターネットなどの ICT を活用し、佐賀県とマイクロソフト社が実施した「地域活性化協働プログラム」と UD の考えで開発された同社の製品や機能が紹介されました。



③「持続可能な共生社会の実現へ向けて」

～国際ユニヴァーサルデザイン協議会 (IAUD) の活動および
第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議のご紹介～

成川 IAUD 理事長により、IAUD の活動概要と昨年12月に浜松市で開催した国際 UD 会議について開催概要と大会宣言が紹介されました。



トークセッション：「温泉地のユニバーサルデザイン」



増加してきた海外からの観光客や高齢者を含むファミリー層への配慮といった、温泉地に求められるさまざまなUDの視点から、新しい旅のスタイルやおもてなしのUDを探っていくことをねらいとしたセッションが行われました。

4名のパネラーを迎え、コーディネーターはIAUDも含め、幅広く活躍されている関根千佳氏（(株)ユーディット代表取締役社長）が務められました。



パネラー：小原健史 佐賀嬉野バリアフリースターセンター会長 嬉野市商工会会長・和多屋別荘代表取締役

嬉野温泉の新しい観光振興策として2007年にバリアフリースターセンターを創設。4つのバリアー（高年齢、身体の障害、心の障害、外国語）の問題解決に取り組む一環で、「車いすのテニス大会」、「障害者とプロの音楽家が出演するコンサート」などのイベント開催について紹介されました。



パネラー：平良博一 久米島観光協会久米島食物アレルギー対応委員会委員長

食物アレルギーを持つ子ども達でも、アレルギーとなる食材に配慮すれば旅行を楽しむことができるのに、社会的な理解や対応が遅れている。沖縄県久米島で行っている、観光事業者だけでなく、旅客運輸、病院、NPOが協力し合って、おそらく世界初である離島観光全般に配慮した食物アレルギー対応の取り組みが紹介されました。



パネラー：村上カルミナ 英会話講師・NBCラジオ佐賀パーソナリティー

外国人から見ると、日本の温泉がどこまで清潔かわからない人が多いという。お風呂の入り方やルールなども含め、多言語でPRして欲しいと提言されました。温泉が大好きという村上さん自身も最初は裸になるのが恥ずかしく、浴衣で突進したら案の定、怒られたというエピソードも紹介され、温泉の入り方のパンフレットの最初には、洋服を全部脱ぐこと、という注意書が。



パネラー：長崎大学 潮谷義子学長

2000年から熊本県知事を2期務めた経歴を持つ潮谷氏は、第1回目の横浜で開催された国際UD会議でも講演をいただき、ご存じの方も多いと思います。できるだけ多くの利用者を想像して、心豊かな社会を創造・実現していくため、この大会でUDのことを、とことん一緒に考えていきましょうと訴えられました。

交流会（会場：和多屋別荘）

今回、この大会のために会場を提供した4つの旅館から、地元の食材をベースに嗜好を凝らした料理の数々や、地元佐賀女子高校のハンドベルリンガーズによるクリスマスソングの演奏、嬉



野で結成された不知火太鼓のチームによる力強い演奏など、地方色豊かなステージが披露され、地元の主催側の皆さんと全国から集まった参加者の皆さんが交流を深めました。

【2日目】12月21日（火曜日）

分科会・総合シンポジウム～佐賀からの提言～



分科会は4つの会場にわかれ、まちづくり、ものづくり、こころづくりという3つの視点と、事例としてパーキングパーミット制度というテーマで開催されました。分科会終了後、再び参加者全員が嬉野市公会堂に集合し、総合シンポジウムが開催され、今大会の推進委員会の大草秀幸委員長の進行で、それぞれの議論の経緯や概要が各コーディネーターから発表されました。

分科会【まちづくり】（会場：大正屋）



テーマ：「繰り返し訪れたい嬉野、住みたくなる嬉野」

最初にまちづくりに関して佐賀県での電線共同溝の取り組みや嬉野での事例、日本と海外の事例が紹介されたあと、新しい流れや今後の課題が議論されました。そもそもグランドデザインが欠けていること、人口減少により中心市街地の衰退や公共交通の破たんなどの問題が発生していること、などが指摘され、もっと意識すべきという提言が行われました。

コーディネーター：古瀬 敏 静岡文化芸術大学デザイン学部空間造形学科教授

パネラー：梶本久雄 (株)ジー・バイ・ケイ代表取締役

山本栄治 (株)福山コンサルタント本社事業部課長補佐

三原ユキ江 佐賀県建築士会理事

谷口太郎 嬉野市市長

分科会【ものづくり】（会場：和多屋別荘）

テーマ：「魅力あるUD製品を追求した『地探地創』のものづくり」

2005年から実施してきた「佐賀県ユニバーサルデザイン推奨品選定制度」の成果の紹介を中心に市場開拓やPRのアイデアなど、幅広い議論が行われました。課題は身近なところにあり、県民の暮らしや伝統技術、歴史から気付きを得て、それらを活かしたものづくりから優れたUD製品が生み出されるというアプローチが提示されました。

コーディネーター：細山雅一 細山UD-Unit代表

パネラー：飯田吉秋 (有)アイ・シー・アイデザイン研究所 代表取締役

見野孝子 (株)LCウェルネス 代表取締役

深海靖 有田焼卸売団地協同組合 青年部長

松尾清美 佐賀大学医学部 准教授



分科会【こころづくり】（会場：和楽園）

テーマ：「UD養育の目指すものについて」

多様な人がいることを、どうしたら、とりわけ子どもたちに伝えられるかという論点で、3名のパネラーから障害のある学生の大学進学・就職を支援するD0-IT Japanプロジェクトや、阪神淡路大震災の復興の過程で神戸市長田区の小中学生で取り組んできたUD授業の事例、そして当事者として大学に進み、自ら研究者として



活動する電動車いすユーザーの体験などが発表されました。語学の先生のように、教員免許がなくても生の体験を伝える機会・アプローチが重要であることなどが議論されました。

コーディネーター：井出将文 佐賀大学 高等教育開発センター 特任教授

パネラー：巖淵守 東京大学先端科学技術研究センター准教授

藏野雅祥 長田区ユニバーサルデザイン研究会副会長

谷岡稔真 佐賀大学 非常勤研究員



分科会【パーキングパーミット】（会場：華翠園）

テーマ：「パーキングパーミット制度の取組成果と今後の普及拡大の課題とその方策」



2006年に日本初の制度として佐賀県がはじめたパーキングパーミット制度は、現在、16件2市に拡がり、九州では佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県の間で相互利用が行われています。その経緯や意義、現状、全国そして海外展開に向けた今後の課題などが議論されました。

コーディネーター：山崎泰広 (株)アクセスインターナショナル 代表取締役

パネラー：松村みち子 タウンクリエイター代表

松田文夫 東京都身障運転者協会 副会長

梅津 弥 福島県保健福祉部高齢福祉課 主任主査

田端 弘 全国脊椎損傷者連合会 佐賀県支部長

大会宣言・閉会式



大会最後のプログラムとして、佐賀嬉野バリアフリースターセンターの小原健史会長が大会宣言を読み上げ、2日間にわたるUD全国大会が閉幕しました。

UD 見学会

嬉野市での開催ということで、エクスカッション企画として市内の施設をまわる「嬉野まち巡りコース」、有田焼の窯元と、ショッピングモールをまわる「有田焼巡りコース」の2つのツアーが実施されました。また、各コース共通で車いすと健常者のテニスプレーヤーがダブルスのペアを組んで行う新しいスタイルのテニス「ニューミックステニスのデモンストレーション」が行われました。



ユニバーサルデザイン製品展示、体験コーナー

大会のメイン会場となった嬉野市公会堂前の特設テント内にて、企業や団体の UD 製品や、「佐賀県ユニバーサルデザイン推奨品選定制度」で選定された製品などが展示されました。IAUD 会員として、NEC、富士通、バンダイ、コクヨ、TOTO の 5 社のブースが出展されていました。また、体験コーナーでは前傾姿勢で乗れる新型の電動車いすや、車いすのまま乗車できる新感覚の乗り物、ロボットスーツなどが実際に体験できるコーナーが設けられ、準番待ちの行列ができていました。



情報保障、ICT 活用など

IAUD のイベントでは普通になったパソコン要約筆記による字幕付けや手話通訳の情報保障のサービスも提供されていました。パソコン要約筆記については地元高校の生徒も今回の大会のためにトレーニングをして、ボランティアで参加したそうで、その他にも大勢のボランティアが大会運営に協力されていましたが、このような大会を開催することにより、新しいスキルの習得や体験など、形はないけれど後に残る大切な成果といえるでしょう。



また、この大会ではツイッター携帯サイトが設けられ、参加者の感想や意見交換がリアルタイムで行われていました。このような ICT の積極的な活用も特徴のひとつとして目につきました。

さいごに

この大会に参加してみて、強く印象に残ったことは、地域を挙げて街ぐるみで UD に取り組むことの重要さとパワー、ボランティアとして参加し、大会運営を支えている多くの地元の皆さんの温かなもてなしでした。こういったイベントの意義は、規模の大きさや参加者の数だけではないことを、改めて強く感じました。

世界の UD 動向

■「第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022」本会議開催！

2月26・27日の2日間、山形県東北芸術工科大学で「第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022」が開催されます。この国際会議は2006年より、サステナブルな社会づくりを目的として開催されています。環境問題がきっかけとなり始まった会議

第5回サステナブルデザイン国際会議



ですが、議論のテーマは一人ひとりの考え方や暮らし方、文明、文化の問題へと広がっています。

昨年開催された国際UD会議でもサステナビリティは重要なテーマとなっていました。グローバルな関係性の問題を考慮すると同時に、各地域・コミュニティの問題を解決してゆかねばなりません。資源やエネルギーのあらゆる消費によって経済価値が生まれるという現代文明の因果関係を断ち、新しい価値観に基づいた、自然な暮らしを実現する必要があります。

そうした方向へ社会が変革している今、デザインを狭い専門性でとらえるのではなく、様々な関連領域との関係を強化しながら、その一般化を図り、デザインの人材とノウハウを再編成することによって、皆で知恵を出し合いサステナブルな社会をデザインしていく必要があります。

第5回目となる今回は、地域の潜在的な価値に気づき、そこに秘めたエネルギーにより実現される地域の未来を描くことをねらいとして「ローカル・サステナブル・コミュニティ」をテーマに掲げ開催されます。ぜひ、IAUD会員の皆さまもご参加ください。

テーマ：Local Sustainable Community／ローカル・サステナブル・コミュニティ

地域固有の条件、多様性、文化、風土など、地域に根差したコミュニティ、産業、暮らしがサステナビリティの原点です。

山形に限らず、地域のサステナビリティを考える時に見えてくる「将来ビジョン」と、それに行き着くにあたって起きてくる課題に対するソリューションを検討し、実践につなぐことを試みます。

開催概要

名 称： 第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022

会 期： 2011年2月26日（土曜日）・27日（日曜日）

＊上記会期以外に下記のとおり前後関連イベントも開催されます。

25日（金）14:30～16:30 前日開催イベント（会場：山形文翔館）

26日（土）19:30～21:30 交流会（会場：パレスグランデール）

28日（月）エクスカージョンツアー（樹氷見学他）

会 場： 東北芸術工科大学（〒990-9530 山形県山形市上桜田 3-4-5 www.tuad.ac.jp）

参加費： 26日＝一般：10,000円、学生：5,000円 27日＝一般：10,000円、学生：5,000円

＊前後関連イベント参加費：

25日（金）山形ロードマップフォーラム 参加無料

26日（土）交流会 4,500円

28日（月）エクスカージョンツアー

プランA：かみのやま温泉+樹氷 2月27～28日（1泊2日） 29,000円

プランB：そば打ち+樹氷 2月28日 9,500円

＊交通費、宿泊費、お食事代は含まれません。参加お申込みフォームで申込みが可能。

言 語： 日英逐次通訳、英日同時通訳

主 催： サステナブルデザイン国際会議実行委員会（委員／五十音順）

久下 玄 (Tsug 11c)、酒井 良治（財団法人日本産業デザイン振興会）、津田 和俊（大阪大学大学院工学研究科特任研究員、suitendo 代表）、本田 圭吾（専門学校 桑沢デザイン研究所 専任教員）、益田 文和（東京造形大学 教授）、柳澤 大樹（Edgy Japan）

共 催： サステナブルデザイン国際会議山形実行委員会（東北芸術工科大学、山形県、山形市）

後 援： 環境省、東京都、大阪府、(社)産業環境管理協会、(社)日本インダストリアルデザイナー協会、(社)日本インテリアデザイナー協会、(社)日本グラフィックデザイナー協会、(社)日本クラフトデザイン協会、(社)日本広告制作協会、(社)日本サインデザイン協会、(社)日本ジュエリーデザイナー協会、(社)日本ディスプレイデザイン協会、(社)日本パッケージデザイン協会、(社)グリーンピースジャパン、(財)地球・人間環境フォーラム、(財)日本環境協会、(財)日本産業デザイン振興会、NPO エコデザイン推進機構、NPO グリーンマップジャパン、NPO バイシクルエコロジージャパン、NPO ミレニアムシティ、大阪大学大学院工学研究科附属サステナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター、筑波大学、東北大学大学院、立命館大学文理総合インスティテュート、日本デザイン機構、グリーン購入ネットワーク、国際グリーン購入ネットワーク、国際機関アジア生産性機構、ネイチャーテック研究会、国際ユニヴァーサルデザイン協議会（その他各方面へ申請中）

協 賛： アミタホールディングス(株)、(株)イースクエア、(株)INAX、(社)エコツツェリア協会、オムロン(株)、(社)日本デザインコンサルタント協会、NPO まちづくり NEXT 運動、(株)山武、(株)リコー（その他各方面へご依頼ご相談中）

協 力： (株)JTB 法人東京、(株)パレスグランデール、東北芸術工科大学 和太鼓「太恵学生組」

事務局： サステナブルデザイン国際会議事務局 鈴木美絵

〒105-0013 東京都港区浜松町 1-22-8（有限責任事業組合エコデザイン研究所内）

Tel：03-6826-1511 Fax：03-3578-1459

mail@sustainabledesign.jp www.sustainabledesign.jp

主なプログラム（各プログラムは個別参加が可能です。）

【1 日目】 2 月 26 日（土曜日）

第 1 部：グローバル・パースペクティブ

基調講演：「現在の地球環境、世界の状況（仮）」

山本 良一（東京大学生産技術研究所名誉教授）

講演 1：「コミュニティをベースとしたソーシャル・イノベーション」

エツィオ・マンズィニ（ミラノ工科大学教授）

第 2 部：ローカル・パースペクティブ

講演 2：「東北文化：山の形をした魂（仮）」

千歳 栄（株式会社千歳建設 取締役会長）

講演 3：「自然と生きる～手作りの暮らし（仮）」

ベニシア・スタンリー・スミス（ハーブ研究家）

アトラクション プレゼンテーション

「サステナブルデザインアイデアコンペ」過去最優秀提案（3 点）

「全国高等学校デザイン選手権大会 2010」優秀提案（2 点）

【2日目】2月27日（日曜日）分科会

9:45～	分科会 A ものづくり ファシリテーター： 植松 豊行（東北芸術工科大学教授）	分科会 B 風土で育む 環境・空間 ファシリテーター： 竹内 昌義（東北芸術工科大学教授）	分科会 C 文化資産を活かした ビジネス ファシリテーター： 久保 雅義（京都工芸繊維大学教授）	分科会 D 新しい価値観に基づいたコミュニティづくり ファシリテーター： 益田 文和（東京造形大学教授／本会議実行委員長）
(45 分)	キーノート： 青木 史郎（財団法人日本産業デザイン振興会）	キーノート： 本間 利雄（本間利雄設計事務所代表）（要請中）	キーノート： 谷口 正和（ジャパンライフデザインシステムズ／日本デザインコンサルタント協会）	キーノート： アンドレア・メンドーサ（DESIS International）
(60 分)	ディスカッション 1			
11:00 ～	ランチョン・ミーティング（山形のサステナブル弁当 @学食） ※時間内に各分科会ごとに昼食をとる。			
	プレゼンター： ● 加藤 公敬（富士通デザイン株式会社代表取締役社長） ● 木下 洋二郎（コクヨファニチャー 株） ● 菊地 規泰（株式会社菊地保寿堂）	プレゼンター： ● 三浦 秀一（東北芸術工科大学准教授） ● エマニュエル・ムホー（東北芸術工科大学准教授） ● 大山由美子（株式会社丹青研究所取締役）（要請中）	プレゼンター： ● 平林 千春（東北芸術工科大学教授） ● 柚木 泰彦（東北芸術工科大学准教授） ● 澤登信子（株式会社 ライフ・カルチャー・センター代表取締役）	プレゼンター： ● 安藤 竜二（ハチ蜜の森キャンドル） ● じゃぼんデザイン事務所 ● 佐竹 勝男（上郷花畑組合）
(60 分)	ディスカッション 2			
	● まとめ ● 終了	● まとめ ● 終了	● まとめ ● 終了	● まとめ ● 終了
15:30～	休憩	201 講義室へ移動 ティーブレイク		
15:45	アトラクション	山形でおきているサステナブルな活動の報告 「ライスインク（仮）」 東洋インキ製造株式会社 マーケティング部 武田一孝 「山形エコハウス」竹内 昌義（東北芸術工科大学教授）		
16:30	各分科会報告	各ファシリテーターより分科会の報告 A・植松 豊行（東北芸術工科大学教授） B・竹内 昌義（東北芸術工科大学教授） C・久保 雅義（京都工芸繊維大学教授） D・益田 文和（東京造形大学教授／本会議実行委員長）		
17:30	クロージング	次回へ向けた課題認識 益田 文和（東京造形大学教授／本会議実行委員長）		
18:00	終了（完全終了 18:30）			

以 上

■新刊紹介「誰でも手話リンガル」誰でも手話で“ありがとう！”ができる社会へ。

賛助会員の松森果林さんより、昨年12月に新しく出版された本のご紹介をいただきましたので、ご本人からのメッセージをお伝えします。

いつもお世話になっております、賛助会員の松森果林です。

このたび、明治書院よりオトナの教科書シリーズ「誰でも手話リンガル」という本が出版されました。

<http://www.manabiya-book.jp/020-menu/post-11.html>

いまどき、誰でも英語で「Thank you!」が言えるのと同じように、誰でも手話で「ありがとう!」ができる社会へ。そんな思いをこめて、手話の面白さの一端を紹介した本です。

「ありがとう」という手話は、日本の伝統競技、相撲の試合で勝った力士が賞金を受け取るときに手刀を切ります。この手刀には、感謝の気持ちがこめられていることからちょっと変形して「ありがとう」という手話ができました。

手話って、形で覚えるよりも一つ一つの手話の語源や、由来、背景などが分かるともっと面白いものです。基本の手話から、とっさの一手話、ホメ手話、冗談手話、お酒のおとも手話まで紹介する雑食系手話の本です。

ユニバーサルデザインへの思いや、聴覚障害者への対応方法、手話にまつわる書き下ろしエッセイも満載です。職場に聴覚障害者がいる方、手話に興味があるけれど・・・という方、ぜひ、手にとっていただけると幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



B5 版 186 ページ
出版社：明治書院
発売日：2010 年 12 月
ISBN-10：4625684579
ISBN-13：978-4625684579

Amazon 紹介ページ

<http://www.amazon.co.jp/%E8%AA%B0%E3%81%A7%E3%82%82%E6%89%8B%E8%A9%B1%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%AB-%E5%AD%A6%E3%81%B3%E3%82%84%E3%81%B6%E3%81%A3%E3%81%8F-47-%E6%9D%B%E6%A3%AE-%E6%9E%9C%E6%9E%97/dp/4625684579>

■「UD先進事例 多様性への挑戦、IAUD会員の取り組み」電子書籍で発刊！

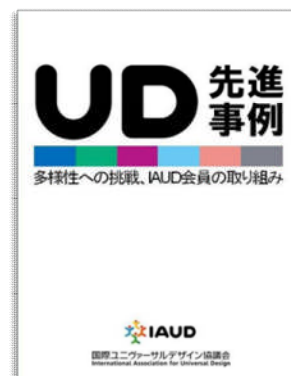
幅広い領域にまたがるIAUD会員の先進的な取り組みが一冊の本になりました。

本書は、IAUD会員向け月刊誌「IAUD Newsletter」で約2年半の間に掲載された32社・団体の取り組み記事をもとに一冊にまとめたものです。

また、本書オリジナルコンテンツとして静岡文化芸術大学の河原林桂一郎副学長に『企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性』と題して書き下ろしていただきました。

UDの原点は多様なユーザーを理解することであり、対象が多様であることは同時にアプローチも多様になりますが、本書は、さまざまなデザイン領域の基本事例として、また企業経営や商品企画にUDやダイヴァーシティの考え方を取り入れるための参考事例としてなど、幅広くご活用いただけます。

なお、発刊当初は、インターネット常時接続の環境でしか閲覧できませんでしたが、iPad版/iPhone版は5回までダウンロードして閲覧することが可能になりました。オンライン書店上では最初の数ページを立ち読みすることもでき、閲覧できる新機種の発売も相次いでいますので、ますます手軽にお読みいただける状況となってきましたので、ぜひ、一度サイトをご覧ください。



<主な内容>

推薦の言葉：「人にやさしい」からはじまるイノベーション

経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長 廣瀬 毅

第1章 企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性

静岡文化芸術大学副学長 河原林 桂一郎

第2章 UD先進事例（32社・団体）

掲載企業・団体（本書掲載順）：東京電力、パナソニック、富士通、日立、トヨタ自動車、TOTO、リコー、岡村製作所、日産自動車、大日本印刷、東芝、三菱電機、イトーキ、積水ハウス、コクヨファニチャー、INAX、丹青社、博報堂ユニバーサルデザイン、静岡県、リムコーポレーション、東洋インキ、セイコーエプソン、東急車輛製造、ダイワハウス、アップアローズ、浜松市、静岡文化芸術大学、ユニバーサルイベント協会、ヤマハ、ユーディット、NEC、バンダイ

※本書をご購入いただいた方で、視覚障がいやディスレクシアなどの特性により、読み上げ可能なテキストの電子データ（.txtで作成）を必要とされる方にテキストデータをご提供させていただきます。詳しくは本書 巻末の【テキストデータのご案内】をご覧ください。



●本書はオンライン書店 shinanobook.com にてお求めください。

価格：1,890円（定価1,800円＋税）

A5判 256ページ

出版社：株式会社UDジャパン

●問い合わせは 国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局まで

【編集後記】○情報交流センターの専従者として2年から2年半にわたり、ともに IAUD 運営を支援してきた森井さんと矢辺さんが予定の期間を終了し、昨年末にそれぞれ自社に戻られました。東京・八丁堀の情報交流センターのオフィスは物が無くなったデスクが2台並び、ちょっと淋しくなっていました。編集後記も矢辺さんの分までスペースがあるので、ちょっと長めになりますが、ご辛抱いただき、おつき合ください。

そういう私も約束の2年間で昨夏ですでに経過し、その後、国際 UD 会議の整理が着くまでということで、センターの業務を続けてきましたが、形としては一旦、自社に戻り、当面、次の体制の目途が着くまで自社をホームポジションとして IAUD の活動をお手伝いさせていただくこととなりました。センターの一員としてできることは精一杯やらせていただいたつもりですが、スタートした当時のことを振り返ってみると、やり残したことも数多くあります。

毎月発行してきたこの Newsletter も 2008 年 4 月から通算で 33 号目、私が作成に関わった号としては今月号で 30 号目、平均すると毎号 25 ページで、総ページ数にする約 750 ページになります。毎月初めという発行予定に対し、このところ大幅に遅れる号が続く、反省しきりですが、それでも何とか続けてこられたのも、ひとえに会員の皆さんを始めとする、貴重な情報をご提供いただき執筆いただいた皆さま方のお力添え、ご協力のおかげです。ファイルに綴じられたバックナンバーを見返していると、改めて感謝の念が湧いてきます。

少し具体的に内容を見てみると、例えば 2008 年 7 月号で CM 字幕の問題をはじめて取り上げ、それから 2 年後の 2010 年 7 月号では各方面で具体的な動きとなっていることが報告されています。全体のボリュームもさることながら、個々にその内容を見ると、会員の皆さんが着実に積み上げてきた活動の成果そのものだなと感じます。また、私個人としても、本誌の取材やセンターの業務を通してお世話になった方々とのつながりが、形として残ったもの以上に大切な、一番の財産となりました。

IAUD は 3 回目の国際会議を終え、また新たな局面に向かいますが、これまでの成果をしっかりと次につなげ、さらに新たな実績を積み上げていっていただくことを強く期待します。この誌面をお借りし、ひとまずは皆さまにお礼を申しあげ、一区切りとさせていただきますが、今後はまた新たな立場で UD 活動に関わり続けたいと思います。本当にありがとうございました。そして、IAUD の活動形態がどのように変わろうとも、今後も皆さんとともに UD 社会の実現に向けて取り組んでまいりましょう！（薦）

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。

ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せください。

また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。

ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.3 No.10

2011 年 1 月 31 日発行

国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局：225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110

電話：045-901-8420 FAX：045-901-8417

e-mail：info@iaud.net

情報交流センター：104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9

(IAUD サロン)

トヨタ八丁堀ビル 4 階

電話：03-5541-5846 FAX：03-5541-5847

e-mail：salon@iaud.net